
小さな王妃の恋愛事情

宵月 璃湫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな王妃の恋愛事情

【Nコード】

N8916S

【作者名】

宵月 璃湊

【あらすじ】

大国フィラベスタスの王妃、ルーシェラディアは実は十歳の女の子！歳の離れた国王としてしまった政略結婚に、民は王族とは辛いものだ…と涙する。しかし、ルーシェラディア自身は自分は”お飾り”の王妃だと納得して王から”離婚”を言い渡されるまで優雅な王妃生活を楽しもう！と超前向き。はたして、歳の差政略結婚はうまくいくのか！？更新遅め

1話

白いフリル付きの柔らかな絹のウェディングドレス。白いベールには小さな桃色の花がちらほらと飾られて、花嫁の金茶の髪に、まるで花びらがついていっているかのようだった。

しずしずと赤い絨毯の上を、たくさん居並ぶ家臣たちに見守られながら花嫁はゆつくりと花婿のもとへ歩みを進めていく。

花嫁の姿に皆が皆、歡喜の色を浮かべ、その美しさに涙する。

長い裾を優雅にさばく様は、ふんわりと羽が背中に生えているかのようにかだ。

花嫁は、逸る気持ちを抑えながら一歩、一歩愛しい未来の旦那様へと歩を進める。

今日は若い二人の愛しい門出。

青々とした空に、木漏れ日の射した木々は今日はいつになく輝かしい緑色を放っている。

小鳥の囀りさえもが耳に聞こえてきそうだ。

花嫁はうらかな陽射しが指す、教会の天使像をうつとりと見上げながら、先に彼女を待つ愛しい人に目を向ける。

今、そっちに行くわ。

愛しい人は、彼女の声が聞こえたかのようにいつもは浮かべない笑顔を一ひつそりと浮かべて、花嫁を見遣る。

今日、二人は神と血の誓約により夫婦となるのだ――…

「……なーんて、おめでたい結婚式こそが乙女の夢よね」

近頃女たちの間で流行りだという恋愛小説なるものを読みながら、ルーシェラディア…愛称はルーシー…は小さな吐息を漏らした。頼杖をつきながら、1ページ1ページめくっていく彼女の眉間には、幾筋ものシワが寄っていく。

「まったく、甘ったるい展開ね。もっと冷や汗が全身にくまなく流れ落ちてベトベトになってしまうような展開にはならないのかしら」

「お言葉ながら、それでは恋愛小説とは呼べないと思いますわ」

ルーシーの横で淡々と主張するのは彼女の1番信頼する侍女だ。

「あら、ただ甘ったるいだけが恋愛ではないと思うわ、ファビラ」

「しかし、ルーシェラディア様のような趣向を取り入れますと恋愛から一転してホラー小説になってしまうと思われます」

はつきりとした指摘にルーシーはムツと唇を尖らせる。

「ホラーの何が悪いの。ちょっとしたスリルがあってこそ、恋愛のキラキラドキドキ感が引き立つんじゃない」

「ホラーには、キラキラドキドキ感を相乗させる効果はほとんどございませぬ。あるとすれば、絶望と恐怖の序曲です」

「まあ、絶望と恐怖の序曲だなんて面白そうね。それを題材にした恋愛小説を書くように出版社に問い合わせてみようかしら」

真剣に頷くルーシーに、侍女は話を変えるように言った。

「さて、ルーシェラディア様。そろそろお夕食の時間ですから、入浴いたしましょう」

「えー、何でわざわざ？」

「今日は週に一度、陛下とご一緒に夕食をお召し上がる日ですから、綺麗にしませんと」

「いいじゃん、別に。陛下だってそんなの気にしないわよ」

「気にする、しないの問題ではございません」

問答無用！とばかりに、身体を抱えられて風呂場に直行されてしまった。

「離せえええー!!」

「じたばたするのはお止め下さい」

一体どうゆう技を心得ているのか、ルーシーの身体はしっかりとフアビラに拘束されてしまっていた。

「さあ、皆さん。ルーシェラディア様のご入浴です」

「「「はい！！！！」」」

それを合図として、どこから現れた侍女軍団にルーシーはサアアと顔を青ざめさせた。

「嫌だあああ！！」

「観念しなさい」

「「「して下さいませ！！」」」

言うやいなや、ルーシーのドレスはぺいっと脱がされ（まさに早業）、身体を洗われ（そりゃもうあちこちを！）、湯につけられた。

「今日は、柚子の香を染み込ませてみましたわ」

「うん…いい香ね」

温かい湯から昇る湯気からほんわかと柚子の香が鼻に入る。

香を満喫するように、目を閉じるルーシーにファビラも小さく微笑んだ。

「もうあと少ししたら上がっていただきますよ」

「ねー、やっぱりあの人と夕飯食べなきゃだめ？」

「あの人と呼ぶものではありませんよ。貴女の…夫なのですから」
ルーシエラディア・リーン・フィラベスタス…フィラベスタス王国の王妃は、ファビラの”夫” 発言に眉をしかめながら、むっつりと押し黙った。

ルーシエラディア・リーン・フィラベスタスは、フィラベスタス王国の若き王のただ一人の王妃だ。
フィラベスタス王国は、ユーロスタ大陸でも最も強大と評価しているほどの王国だ。

ユーロスタ大陸には、数ある国が存在するがそれはどれも小国ばかり。フィラベスタスほど力もあり、土地もある国は滅多にない。商業、農業、工業に優れたフィラベスタス王国はまさに敵なし、といった大国であるが国とはいつどう変貌するか分からない。だからこそ、どの国も密約や誓約により不用意は戦をしないよう同盟を結び、形ばかりの平安を作ろうと努力する。

同盟といえば、最も使われる手段が婚姻だ。
国と国を婚姻により結び、最も誓いの意味がある”血”によりその絆を確固たるものにする。

昔は今よりも領土拡大やら、利益増大を狙った戦が乱発していてそのたびに婚姻という枷が成されていった。
今はある程度、戦というものは消えつつあるがやはり同盟として婚姻するのは、もはや決定事項のようになっている。

さて、本来は鉱業が盛んであった山に囲まれた小さな小国の第7王女のルーシエラディアも数ある同盟の中の一つとして婚姻した。し

かし、相手はあの大国、フィラベスタス。

王女として、これほどの優良物件な婚姻はないだろう。

現に、フィラベスタスの王妃という座は、どの国も喉から手が出るほど欲しいものであり、さまざまな喧騒や牽制が起こった。

…が、やはり1番騒動が大きかったのはルーシエラディアを王妃とする、とフィラベスタス国王が正式に公表した時だろう。

あれには、どの国にも衝撃が走った。

なぜなら、

ルーシエラディアの国は、数ある小国の中でもさらに小さな国だったこと。

フィラベスタスが同盟を結ぶにしては、いささか…いや、かなーり物足りない相手だろう。

もうひとつ、

フィラベスタス国王は御年二十歳という、すこぶる若々しい王だ。

おまけに文武両道、眉目秀麗であるパーフェクトボーイ…ではなくパーフェクトキング。

その麗しい姿と賢王としての実績を知らない者は大陸中には誰一人としていなかった。

だからこそ、王女や貴族の姫たちは躍起になりながら王妃を狙い、後宮に何人もの美女や美少女たちが送られた。

それでも、王は妾妃として何人か召し上げはしたが王妃にはしなかった。

そこで、妾妃や王宮内の間では男児を産んだ者が王妃になれるのだと噂していたのだが…あっさりとルーシエラディアに白羽の矢がささり、王妃の座を手に入れてしまった。

しかも…しかも、だ。

さらに周りを驚かせたのが
ルーシェラディアがまだ十歳の少女である、ということだった。

と、いうわけでルーシェラディアは史上最年少王妃としてフィラベ
スタス国に嫁ぐこととなり、見事王族としての政略結婚なるものを
成し遂げたのだ。

2話

「ルーシェラディア、そのような膨れっ面をしてどうしたのですか」

「…何でもございせんわ、陛下」

しかし、何でもないという彼女の頬は明らかにぷっくりと膨れている。小さなリスが木の実を口いっぱい頬張る姿にそれは酷似していて、思わず微笑んでしまいそうな可愛らしさがある。

陛下…フィラベスタス国の王でありルーシーの夫である、キリクロイス・ディエ・フィラベスタスは幼い妻を見て、小さく口元を綻ばせる。

その顔は妻というよりも妹を見ているような感じだった。それがさらにルーシーの頬を膨れさせることをキリクは知らないのだ。

週に一度、いつも仕事で多忙なキリクと唯一共に時間を過ごせる夕食をルーシーは、毎日毎日指折り数えるほど楽しみにしていた。

ルーシーはキリクが好きだった。しかし、それはキリクがルーシーに見せるような兄妹がもつような親愛の情ではなく、れっきとした”男女”の愛だ…と、ルーシーは思っている。

もちろん、恋愛の”れ”の文字とも関わりをもったことがないから、それが本当に愛なのかは分からない。

でも、ルーシーは間違いなくキリクが好きだった。

キリクロイス・ディエ・フィラベスタスは、とても美しい夫だとルーシーは自負している。

美しい、が男に当て嵌まるものとはキリクロイスに会うまでルーシ

ーには考えもつかなかった。

だが、キリクロイスは正に”美しい”を具現化したような美男子だ。

乙女ならば羨ましさに溜め息をつきたくなるほどサラサラの銀混じりの漆黒の髪。蒼氷色の瞳はどこまでも透明で、その瞳には見るものが引き込まれそうなほど強く光り輝いている。十歳という歳を考えてみてもさらに小柄なルーシーからすると巨人とも思えるほどの細身の長身。だが、決してヒョロリとした細身などではなく、鍛え抜かれた筋肉と意外とがっしりした体軀は女なら一度は抱かれてみたいと思うほどの素晴らしさだ。これで文武両道というオプシオンまでつくのだから、惚れない女などいないわけがないだろう！とルーシーははつきりと言い切れる。

我が夫ながら、なんと素晴らしい方なのだろう。

ルーシーはそう得意満面にもなる代わりに、自分のあまりの平凡さが際立ってしまい残念でならなかった。

せめて美少女であれば良かったのに…、と何度鏡を見て溜め息をついたのかはこのフィラベスタス国に来てからは数え知れない。

ルーシーは自分でも自分のことを可愛いとも綺麗とも思わなかった。ふわふわのくせっ毛ではなく、ほとんど寝癖のように絡まる厄介な金茶の髪。キリクとは違う空色のような瞳は気に入ってはいるが、いかんせん目が大きすぎて、小柄なルーシーには悪目立ちしすぎている。

ふつくらではなくガリガリとした身体つきは残念でならないし（このまま女性のような丸みを帯びた身体つきになれるかの心配は増すばかりだ）、何よりも鼻の上にポツポツと浮かぶ雀斑そばかすはいただけない。白い肌が雀斑を目立たせてしまっているからだった。

これらを統合して自分を全体的に見ると…中の中、もしくは中の下くらいかな、とルーシーは自分自身に絶望した。

この様ではたとえ、キリクに見合うぐらいの年齢になったとしてもますます惨めになるのが予想される。

お姉様たちは美人なのになあ…

他国に嫁いだ、または今だ祖国にいる母に似た美人揃いの姉たちを思い浮かべてルーシーはやはり何度目かの溜め息をついてしまう。目の端にうつすら涙が浮かぶのは、目をつぶって欲しい。…でない、さらに惨めになるから。

「ルーシエラディア？先程から溜め息ばかりついているが具合でも悪いのですか」

「いえ、その…おやつのお菓子をたくさん食べ過ぎてしまったので…食欲が出なくて」

我ながら何て子供じみた（まだ子供だけど）ごまかしかなだらう！もっと、こう…大人の女のようなごまかしかたは思い浮かばないのだろうか…！

くうう…っ！と地団駄を踏みたくなるのをこらえる。

これをしてしまえば、また確実に【大人の女】が遠ざかってしまう。

キリクは、ルーシーの内心の悔しさなど全く気づかずに「おやおや」と穏やかな笑い声をあげる。

その美しさ又何者さえも魅了する魅惑の声にルーシーはポツと頬を染めてしまう。

陛下つてば……本当、何であんなに美しいんだろ…。

これならば、王という身分を抜きにしても女たちの視線を全て虜に
してしまえるだろう。

それを思つと、胸に鋭い刺がチクチクと刺さる。

私は…王女だから…陛下の王妃にしてもらえたのよね…

厳密にいうと王妃に【飾りの】を付けなくてはいけないが。

陛下が自分と同じ年の分だけ年上であること、すでに妾妃が何人か
いるのを嫁ぐ前から予備知識として知つてはいた。

ルーシエラディアの父とて、王妃（今は亡くなられた）、第二王妃
（私の母）、妾妃ともっている。

まして自分は十歳。月の障りすら訪れない、女とはいえぬのが王妃
となるのだ。だから、妾妃がいることに何の嫌悪も沸かなかった。

ただ、やはり王というのは何人もの女を愛する移り気ある奴なんだ
な…、と嘆息はしたが。

しかし、その嘆息もあの美貌の賢王にあえば納得せざるを得なかつ
た。

私は彼の隣に並ぶべき王妃の器に足りていないー

ならば、他の娘たちを召し上げるのは当たり前だ、と

もちろん、だからといって王妃として王を支えるべきことは、いず
れつつがなくやるつもりであつた。…否、そうしたいと思わせる人
なのだ、彼は

彼を一目見て、私は彼に仕えたいと真に思った

私が男であれば彼を支える良き官僚になろうとしたはずだ。

しかし、自分は幼いけれども…女。

それがどれだけ悔しかったか…今でも覚えている。

ただ、その時はまだ彼に対する愛は忠誠を捧げる”愛”であり、決してこのような”恋”にはなっていなかった。

そう、あの日を境に

私はこの賢王を誰よりも愛することを誓ったのだ…

それが、実らぬ恋であると幼心に理解しながら…

「陛下は、いつも仕事仕事と忙しくされていますがきちんと睡眠はとっているのですか」

十歳とはいえ、小さな幼児期より王女としての自覚や教養を身につけさせられたルーシーの言葉は、少女特有の小鳥のような高く愛らしい声を抜かせば、幾分か大人っぽい。

くりんと丸まった瞳をキリクに向けると、キリクは普段の執務中では浮かべない笑みを少しだけ浮かべる。

「しっかりとっていますよ」

「ですが、目の下辺りにうつすら色づきがあるのはクマでしょう？

仕事熱心も王としては素晴らしいですが、自分のお身体のことも考えて下さらないと周りが心配いたしますわ」

「…ルーシェラディア、君はまるで私の母と同じようなことを言いますね」

やれやれ、と首を振るキリクにルーシーはさつと頬を紅色に染めるが、細い眉を器用に方眉だけあげる。

「私は、陛下のことを心配しているのですっ。それに、王太后様にも言われていることをしていない陛下こそ、考えを改め直して下さい！」

「ああ、わかってますよ。ルーシェラディア…君は時に幼いながらも厳しいことを言いますね」

優しく名前を呼ぶ声に嬉しいのに、…悲しい。

陛下の口ぶりはいつも、（少し）口やかましい妹を宥めるているかのように思えるからだろうか。

むっつりと黙り込んでしまったルーシーに、キリクは右よりも左側が伸びた前髪を弄りながら困ったような顔をする。

そして、ルーシーの座っている椅子にまで来ると彼女の強烈なくせ毛を大きな手の平で優しく撫でた。

「陛下…」

きゅん、と胸が異様に高鳴る。

この温かく優しい手…これをいつまで私は味わえるのだろう。

「君にいつも心配かけているのは申し訳なく思ってはいるのです。」

すみません、ルーシエラディア、私はそろそろ執務に戻ります」

「あ……」

離れていく手の温もりに、ルーシーは思わず小さな声を上げた。それをキリクが耳にしたかどうかは分からないが、一瞬だけ眉をたれさせるとすぐにマントを翻して行ってしまった。

「…無理しすぎないで」

呟いたルーシーのか細い声は、キリクが出て行ってしまった扉に向かってひっそりと放たれ、閉じられたー…

3話

「つつかれたあああ」

どさつ！と、大の大人が3〜4人はゆうに寝転べそうな天蓋付きベツドにダイブする。

「ルーシエラディア様」

はしたないです、とファビラに諫められるがルーシーは気にせず、柔らかなベツドを堪能する。やはりといいか、さすがというか…彼女の祖国のベツドとは比べものにならないほどふかふかして気持ちいいのだ。

「だって、疲れたんだものー」

「陛下とお食事しただけではありませんか」

「それが緊張するの！！あの麗しい陛下と向かい合って食事だなんて……っ！！緊張しすぎて汗と共に、目から血まで出そうだったわー！」

そんなホラーな緊張の仕方があるか、と呆れるがファビラは懸命にもそれは口にださなかった。

幼い自分の主であるルーシーが陛下の御前だといたく緊張する理由をファビラは察しているからだ。

「…汗はまだ仕方ないとして、血を出すのだけは勘弁して下さいね」

「うー…でもね、でもね、陛下といると全身の血管という血管が暴発しちゃうんじゃないかな！？ってくらい、熱くなるのよー」

むすつ、と唇を尖らせる姿がいつも”歳のわりに大人びている”と評価されているルーシーを歳相応に見せる。

「あーあ、陛下があんな美しい人じゃなくて、ごつくて脂っこいおっさんだったら良かったのになぁ」

先程からの緊張が緩んできて完全にくだけた口調で話すルーシーに、ファビラは困ったように微笑んだ。

「それはまた…極端すぎるものではありませんか」

「いいのよ、今の陛下だって良い意味で極端すぎるもの！」

「まあ…それはそう言えますが」

ルーシーは絡まった髪を忌ま忌ましげに指で梳いてから、ほつっと息をつく。

「ファビラ、私があのお方の妻だって何だか今だ実感が沸かないわ」

どうして私があの人妻に成り得たのだろう…

まさに神の采配、もしくは悪質な悪戯としか思えない

「私はこんなに子供で…、知識や教養も王妃としてはまだまだ未熟だから…」

小さく、傷一つない柔らかな手。今まで王女として当然だと思って

いた手は、なんて小さくて…頼りないのだろう。

ベッドから下りて鏡の前に立つ。映る姿は、不安げに瞳を揺らせる”子供”。

白いネグリジエに包まれた身体は、少女と呼べるような凹凸すら皆無に等しい。

「早く…大人になりたい」

あの人の側に立つに相応しい王妃に。

そして…あの人を愛するに相応しい女になるために。

愛されるのは夢のまた夢だと自覚はしている。
けれど、愛するのは自由だとルーシーは胸に手を添えた。

「ルーシェラディア様、お風邪を引かれては大変ですよ」

ルーシーよりも5歳上のファビラは侍女であり、親友であり、姉のような人だ。鏡越しにルーシーを見つめるその瞳に、ルーシーの不安げに揺れる瞳が優しげなものに変わる。

「ありがとう…ファビラ。それに、今はもう二人つきりだから、いつものようにルーシーと呼んでちょうだい」

二人の時は主従関係など必要ない。それはずっと昔から決めた二人だけの約束。

「ええ…ルーシー」

「ファビラ…一緒に来てくれてありがとう」

ぎゅっとファビラに抱き着くルーシーに、ファビラは”氷の女”とあだ名を評する鉄面皮を緩ませる。

「構いません。私はルーシーにずっと仕えていくと決めたのですから…」

幼くて愛しい主を抱きしめながら、ファビラはそっと瞳を閉じた。

――――

「ヨーデン。その報告書は明日までに必ず中央局に届けて下さい」

「はいはい。必ず明日届けますよ」

手渡された書類を抱えながら、ヨーデンは今だ執務室の中央で机に重なる報告書や嘆願書と格闘している主を見遣る。

「ところで陛下」

「何です？」

「チビ姫とお食事はどうでした？」

書類から一瞬だけ目を上げて、キリクは側に控えてにやにやしている親友を見る。しかし、すぐに書類に目を戻してペンを動かしている。

「いつも通りでしたよ。ヨーデン。それと、彼女は仮にもこの国の”王妃”なのですから、チビ姫とは失礼です」

「そりやそうだけど、王妃っていうよりチビ姫じゃないか、あれ。ちよこちよこ動く姿が小動物みたいで」

確かにそれは言える。

今日も、美味しそうにもぐもぐ口を動かすルーシェラディアの姿は冬に備えて食糧を蓄える動物たちのようだった。

「いくら小さくて動物みたいでも、彼女は私の”妻”なんですよ」

事実ではあるが、妻、という言葉に少し違和感を感じないわけではないとキリクは心の中で思う。

彼女といると、妻というよりも妹と一緒にいるような気持ちになるのだ。

「すごい幼妻だけだな。ていうか、俺はおまえがなぜあの子を妻にしたのか信じられないけど」

一国の王であるキリクに”おまえ”などと気安く呼べるのは、このヨーデン・グルベルクがキリクの幼い頃からの親友であるからだ。つた。

グルベルクといえば、キリクの祖父の代に王弟であったルイヴィー・ラズ・フィラベスタスが臣下に降った時に課された公爵家だ。

王家の血筋を引いていることから、グルベルクはフィラベスタスの貴族中でもかなりの高位とされている。

ヨーデン・グルベルクはキリク直属の近衛騎士隊長という役割もあるため、常にキリクと共にいるのだ。

時には秘書という役割も兼ねて、こうした書類整備などを手伝わせている。

「まさか恋してる…とかか？そしたらおまえ…あれだ。最近城下で流行っているロリコンだぞ」

ロリコン発言に、キリクはピクツと眉を動かすが表情は微動だにしない。

整いすぎて人形のような顔立ちをした青年王は、書類を片付けながらも淡々と答える。

「恋なわけないでしょう。彼女を選んだのは、彼女しかいなかったからです」

「は？」

「国内、国外を見るに私に対して野心を伸ばそうという意志がない者は少ない。その中でも、交易などで近づいておきたい国となればさらに数が絞られ…ルーシエラディアの国に問えば、王が第七王女である彼女ならば嫁がせても良いと言われましたから」

「第七…、それならまだおまえの歳に似合う娘たちがいるんじゃないのか？」

「かの国に王子は生まれていません。だから第一王女は国の後継ぎとして婿を取らなければならないと言いますし、ほかの娘たちも既に嫁いでいたり、婚約者がいたりで…彼女しかいなかったんですよ」

「それはまた…随分となめられたな。いくら婚約者がいるとはいえ、まだ成人すらしていない十歳の女の子を嫁がせるとは」

「私としては、あそこの鉱山からとれる資源に魅力を感じただけなので、どの姫が来ようと問題はありません」

王という立場からか、”恋愛” というものを既に諦めている…否、その存在にすら目を向けないキリクに、ヨーデンは溜め息が零れる。

そりゃ…王族ともなれば、恋愛結婚なんてほとんど望めないだろうけどさあ…

「まあ、ルーシェラディアは子供ですが、自分の野心に燃える高慢ちきな姫ではないのがせめてもの幸いですね」

王であり、さらに美貌も美しいキリクを狙う女たちの陰湿な争いは、日常茶飯事だった。

そんな女たちに囲まれたキリクだから、さらに”恋愛” などから遠ざかってしまっているのだと思うと、ヨーデンは王という立場につくキリクに同情を禁じえない。

だが、そんな同情もキリクには必要のないことなのだ。

ヨーデンは小さく首を左右に振ってから、仕事に明け暮れる親友に軽口を叩く。

「あのチビ姫が将来どうなるかが楽しみだな」

「そうですね」

全然楽しみじゃなさそうなキリクに、ヨーデンは苦笑しつつ、キリクに頼まれた書類を抱えて部屋から退出していった。

ヨーデンが退出したのを見てから、キリクはぽつりと呟いた。

「…本当は王妃など必要ないですけどね」

4話（前書き）

実兄 ↓ 隣国の王子

4話

「王妃様…」

「なあに、コレット夫人」

「お勉強に熱心なのは、よろしいのですが…それは？」

「ああ、これ。可愛いでしょう？何でも、400年前にとある世界を支配しようとして現れた悪魔リゼリーをイメージして作ったらしいの」

ニコニコと微笑むルーシーに、ルーシーの家庭教師でもあるコレット夫人は眩暈に身体をのけ反らせた。

「そんな…悪魔などと…！どこが可愛いのですか！？」

一生懸命、ノートに習ったことを書き込みするルーシーだが、その隣に置いてあるぬいぐるみは”可愛い”という言葉は絶対に当て嵌まらないものだった。

「あら、コレット夫人にも分からないのかしら。人の顔を宿したギザギザの翼に、二股に別れた尻尾。何より、目が赤と青という二色に加えて、口元から覗く獲物を一撃で切り裂きそうな牙…全てにおいて完璧な”悪魔”なのよ。可愛いじゃない」

「なぜそこで可愛いという形容詞が出てくるんですか！？普通ならば”恐ろしい”とか”怖い”でしょう！」

「むー、これを下さったオリブアーお兄様も納得してくれたのに」

ぶつぶつと不平を零すルーシーに、コレット夫人は頭を抱える。ルーシーは勤勉で十歳の女の子とは思えないほど落ち着いてはいるのだが、こと趣味や好きなものに関しては賛同者が限りなく少なかった。

趣味…洞窟探検、いわく付きの屋敷めぐり、幽霊探し、呪い、悪魔の研究…etc

好きなもの…怖いもの

代わりに、貴族令嬢たちが好むような美しいもの、華美なもの、ドレス、宝石、刺繍などは全然興味を抱いていなかった。

祖国では、”姫らしくない姫”として王宮内では有名で、さらに素直な性格であつたからこそ彼女は親戚筋でもある隣国の王子と共にいつも何かしらの騒動を起こしては、近衛たちを冷や冷やさせついった。

変わり者の姫と（隣国では有名な変わり者の）王子のお付きになるというのは、近衛にとっては地獄だが、その間に近衛としての剣技や勘などが鍛えられるというのでもまた有名だった。

知らぬは本人たちだけだったが…。

コレット夫人は、ルーシェラディアの祖国から付いてきたお目付け役兼家庭教師であり、彼女の奔放さを一番理解し、一番被害を被っている者の一人だ。

「まあまあ、姫様の趣味は今に始まったことじゃないですし」

苦笑いしながら、それを眺めているのはルーシェラディア付きの護衛であるダキアス・ルージンだ。

ダキアスはルーシーの祖国では四つに分かれた近衛部隊の第二部隊の隊長を勤めあげていた実力者だった。此度はルーシーがフィラベスタスに嫁ぐということで、隊長を退き、ルーシー専属の護衛士になつてくれた、ルーシーにとっては兄のような存在であつた。

「ダキアスも素敵だとは思わない？これ」

「姫様、申し訳ありませんが俺にはその奇怪な怪物が素敵には見えませんね」

「そーお？この血の気も凍るような瞳や牙が、ゾクゾクするのにい」

「姫様は相変わらずですね。その感覚は理解に苦しみます」

「私からしたら、貴方たちがこの麗しい造形美を理解してくれないほうが悲しいわ」

ねー？と、泣く子はさらに泣き叫ぶようなぬいぐるみを抱きしめる姿は、幼くも見えるが可愛くは見えなかった。

頬を引き攣らせるコレット夫人に、諦める、という意味をこめてダキアスは肩を叩いた。

「ルーシー様、コレット夫人、お茶が入りました」

ほのかな甘い香りと共に部屋に入ってきたファビラに、ルーシーは顔を上げて微笑んだ。

「ファビラ、今日のお菓子はなーに？」

「今日のお菓子は料理長が特別に作ってくれた、チェリークッキーです」

「やったー！」

急いでテーブルの上の筆記用具やノートを片付けるルーシーに、コレット夫人は「はしたないですよ」と窘める。

テーブルの上に並べられた人数分のカップやクッキーに、頬を緩めながらルーシーはファビラやダキアスにも同席するようにと勧めた。

「ですが姫様。俺は一応護衛士ですから、一緒に席に着くというのは…」

「いいじゃない。たまには休憩するのも大切よ。ほら、ファビラも早く座って」

困ったように笑う二人を無理矢理促すようにして、同席させる。コレット夫人も眉を潜めはしたが、いつもの事だと諦めてカップに入った紅茶を啜った。

「こうやって、皆でお茶をすると楽しいわよね」

「…本来ならば、王妃と同席など出来ないんですからね」

「もー、コレット夫人。私がいって言うからいいの！このクッキー美味しいよ、食べてみて」

「…コレット夫人、私が言うのも何ですが姫様には…そういう常識というのは無理かもしれませんわ」

「……はあ」

溜め息をつく二人を他所に、ルーシーはダキアスと話を咲かせる。ダキアスは祖国での武勇伝やら、ここで起こった面白い話などを話してはルーシーは楽しく笑っている。

こう見れば、仲のよい兄妹のようだ。だが、ルーシーはれっきとした姫であり、王妃。

このように専属とはいえ一介の騎士とお茶を飲み、大声で笑い、はたまたクッキーを食べさせるなど…してはいけけないのだ。

「前途多難、ですね…」

今はまだ”子供”ということでは王妃の仕事をするとはなしにしてもらい、一般教養の勉強をさせているが、ルーシエラディアとて成長して、しだいに”少女”から”淑女”へとなっていく。そしたら、王妃という役割からは逃れられないのだ。

その”いつか”のためにも、ルーシエラディアは今からその自覚をもち、覚悟を決めていかなければならない。

だが…

「ねえ、ファビラ、このクッキーすつごくおいしいわ！もつとないの??」

「ルーシー姫、あまり食べるとお腹を壊してしまいます」

「やあね、私が食べるんじゃないわ。これはあの人たちに持つていくの」

”あの人たち”という言葉にコレット夫人は眉を潜めた。

「王妃様、あの人たちというのは…」

「ダキアスと稽古してる兵士さんたちとか下働きの子たちとか、いつも庭を綺麗にしてくれる庭師さんたち」

つらつらと個人名を指折り数えながら告げていくルーシーに、コレット夫人は今日何度目かの眩暈に額を指で押さえた。

また癖が出てしまわれた…

ルーシーは、姫らしくない姫という名を欲しいままにしていたが、その故あってか王族ではあっても気位というのはまるでなかった。

本来ならば王族が関わり合うはずのない人物（下働き、庭師、下級兵士など）にも、良く言えば分け隔てなく、悪く言えば考えなしで、接していた。

それは王族側や貴族側から見れば”変わり者”として犬猿されていたが、

そのような民側からすれば、ルーシーの評価は非常に高かった。

また趣味はどうあれ、その明るさから城に仕える者のほとんどが彼女を慕っていたのだ。

確かに、自国であれば王族としての自覚こそないと呆れはあるが、それでも幼いという理由と、その優しさに微笑ましいとも思えた。

だが、しかし！！！！

ここはもう自国ではないのだ。

自国で許されていたからここでも…なんていうのは許されない。王妃は国の女性の中で二番目に位が高い。

そして、王族とは何たるかを民に示すこともれっきとした役割だ。

だから、この国に来てからというもののルーシーが勝手に出歩いたりしないように常にダキアスに見張りを頼んでいたのに…っ！！

目の前で、クッキーをあげる人物をリストアップしているルーシーを見てから、ダキアスのほうを向く。

ダキアスは、ちろりと舌を見せて笑った。

訳すると…

『あはっ ごめんね!』

「ダキアスっつ!!! 貴方という人は!!! それで本当に王妃様の護衛ですか!？」

「もちろんですよ。俺はれっきとした姫様の第一騎士でっす」

「それならば!!! なぜ王妃様の奇行を止めて下さらないのです!」

「一応止めたんすよ? だけど姫様が…」

ちらり、とダキアスは横でクッキーの包み紙を用意するルーシーを見遣る。

ファビラに手伝ってもらいながらクッキー詰めをしていたルーシーは視線に気付いて顔をあげた。

「何かしら?」

「いやね、姫様が…」

「王妃様、そのように下々の者と必要以上に仲良くなさるうとしてはいけませんわ」

ダキアスの言葉を遮り、憤然と言うコレット夫人にルーシーはきょとんと目を丸くした。

「いいですか、王妃というのは王族の中でも二番目に位の高い女性なのです。ですから常に民の見本として良き振る舞いをし、王族の威厳と地位を民に示す存在とならなければならぬのです。」

「分かつてる。私はこれでも王妃だもの。王妃の役割くらいは察してます」

「でしたら…!!」

「でもね、コレット夫人。私はまだまだ未熟だから民にとって”良見本”がどんなものかさっぱり分からない。もちろん、教本通りの淑女らしい振る舞い、マナー、教養も大切。だけど、私と民の環境は違う。それが、彼らといるとよく分かるの…」

「王妃様…」

「環境が違えば、私が習った教養なんてほとんど通じない。民には民の教養があるの。それを学ばないと…民に示せる見本になどない」と私は思う」

微笑みを浮かべたその顔に、コレット夫人は何も言えずに見惚れていた。

目の前にいるのが十歳の少女だというのも忘れてしまいそうになる、穏やかな包みこむような微笑み。

自分のことを平凡だ、ブサイクだ、などと言ってはばからないルーシーのその笑顔は、いつもの明るい笑顔とは違って、人を惹きつけ

る魅力がある。

黙ってルーシーを見つめたままのコレット夫人に何かを勘違いしたのか、ルーシーは慌てて言い募った。

「もちろん、王族の威厳とか地位とかを示すのは忘れないから！ 本当に！！ ねえ、ダキアス」

「あれ？ 先日は確か… 下働きの子供の遊び相手をして泥まみれになつてたような…？」

「ダ、ダダダキアス！！ 私がいっ泥まみれになつたのよ！？」

「えーと、ひい、ふう、みい…」

「ちよつ、何数えてんのよ！？ コ、コレット夫人？ これはね、あの、その…」

わたわたと両手を意味なく動かすルーシー。

コレット夫人は、本当に、自分でも分からないほどうつすらと微笑んだ。

これはなかなか…

将来が楽しみな王妃様ですね

今だ何かしらの言い訳を考えようとするルーシーに、コレット夫人はきっぱりと告げた。

「王妃様のお考えはよく分かりました。…私も、まだまだということでしたわ。王妃様、王妃様は今はまだ本当の王妃様ではありません。…ですが、これから本当の王妃を目指さなければなりません。…そのために視野を広げるといふのは…よい考えだと思います」

「コレット夫人、それって…」

「…最低限の威厳だけは守って下さいね」

「ありがとう、コレット夫人!!」

満面の笑顔を浮かべたルーシーは、ふんふんと鼻唄を歌いながらまたクッキー詰めの作業を始める。

それを紅茶を飲みながら眺めていたコレット夫人に、ダキアスはいんまりと笑いかけた。

「よく許しましたね、鉄壁の淑女とまで呼ばれた貴方が」

「あら、許さないほうが良かったかしら。氷狼の騎士殿」

鉄壁の淑女、という二つ名をもつコレット夫人に 氷狼の騎士という二つ名をもつダキアスは、クスリと笑った。

「いいえ、嬉しい限りですよ」

その隙のない笑顔を一瞥してから、コレット夫人は紅茶を飲み干す。

二人の視線の先には、

小さな愛らしい王妃が一生懸命クッキーを詰めている姿があった。

5話

「ルンルンルーン」

「おや、随分と機嫌が宜しいですね。王妃様」

「あら、リリファスさん！ご機嫌よう」

前王妃…つまり、王太后が丹念に手入れをした庭の庭師をしているリリファスを見かけてルーシェラディアは顔を綻ばせながら微笑んだ。

無邪気な笑顔を浮かべたルーシェラディアが、ドレスをたくしあげながら土にまみれた庭園に入ろうとするのを後ろから付いてきた王妃付きの侍女がぎよっと顔色を変える。

「お、お、王妃様！！何をなさるおつもりですか！？」

「ん？ちよつとリリファスさんに挨拶を兼ねて、王太后様の庭園を見てみることにしようと思うの」

「お、お待ち下さいませ。昨晩は雨が降ったようですので土がぬかるんでおります。今お行きになればせつかくの御召し物が汚れてしまいます！」

後日改めて伺うようにして下さいませ！と告げる侍女に、ルーシェラディアは元気良く首を降った。

「私は構わないわ。それに雨露に濡れた花たちはまた見惚れてしまふほど美しいのよ。女が泣き叫んだ後に飛び散る涙みたい……私としては血の雨が降ってみるのもまた別の美的センスがあると思うけれど。それに、服なんて汚れたら洗えばいいの。貴女たちが洗いたくないなら私が洗うわ。じゃ、行ってくるわね！」

ポカンと口を開いて押し黙る侍女を尻目に、ルーシェラディアはルンロンと鼻歌を歌いながらリリファスのもとへとかける。ばしゃつ、と泥水が撥ねるのにも構わず駆け寄るとリリファスは困ったような顔をしてルーシェラディアを出迎えてくれた。

「ルーシェラディア様、せつかくの御召し物に泥水が……」

「もう、リリファスまで服の心配！？そんなに服に気をつかっているなら私は裸でいるほうがよっぽどマシよ！！」

裸でいるほうがマシだ！と拳を掲げて言い放つ王妃にリリファスは苦笑する。

そして、さりげなくルーシェラディアを泥水から引き離しつつ幾分か固い地面のもとへ彼女を誘う。

庭園の奥には白い円形の柱に囲まれた小さなベンチがある。

そこは王太后が、王太子妃：つまり先の陛下が殿下だった時に造られたもので、そこで二人はひそやかに愛を育んでいたと言われている。

普段は人を寄せつけない庭園の奥にあるせいか、その存在を見知っているのは今のところ、陛下はもちろんのことルーシェラディアと庭師であるリリファスくらいだった。

ルーシェラディアは花たちの優しい香りに包まれたここが大好きで、知らず知らずのうちに頬が赤く高揚してくるのを感じていた。

リリファスと共にそのベンチに座りながら、うつとりと瞼を閉じる。ほのかに香る甘い花の香と、木々がさらりと風に揺れる音、暖かい光を肌で感じて夢心地になってしまふ。

船を漕ぎそうになっていると、隣にいたリリファスが笑った。

偏屈爺さんとして有名なリリファスの笑顔を他のものが見たら、まず目を疑うだろうがルーシェラディアは見慣れたもので、その笑顔につられるように自身も頬を緩ませる。

「いつ来ても、本当にいいところね」

「そうですね…、ここは王太后様もちよくいらつしやられる場所ですし、時には陛下も散策されているのですよ」

「陛下もですか？」

あの見目麗しい彼が、花に囲まれながらゆつたりと歩く様を想像し……あまりに似合いすぎていて夢か幻くらいに思ってしまったそうだ、とルーシェラディアは溜め息をついた。

「王妃様も、たまには陛下と訪れてみてはいかがですか？」

「うーん…誘ってはみたいけれど、陛下はお忙しいから……。私と来るよりは一人でゆつくりとここにいらつしやったほうが気休めになると思うの」

ルーシェラディアの言葉を聞いて、リリファスは歳にも関わらずその明るい緑の瞳を見開いた。それから、ふっと孫を見るような温かい瞳をルーシェラディアに向ける。

「王妃様は、本当に陛下のことを想っていられるんですね」

「……………っ！いい、いえ、ね？あの、私は陛下の御身が心配で…」

「お顔がクリスマの花のようにお赤くおなりですよ？」

クスクスと笑いを収めない彼に、うっっつとルーシェラディアはほてった頬を両手で隠す。

小さな手に隠しきれない柔らかな頬が赤くなっているのを見て、リリファスは可愛い王妃の姿に微笑ましくなった。

「もう！リリファスさん、結構意地悪ね」

パタパタと風を仰ぎながら、ほてった頬を冷ましているとリリファスは穏やかな顔をしてルーシェラディアを見つめていた。

「意地悪というわけでは…、私はそのように頬を染めていらっしゃる王妃様は大変可愛いと思います」

につこりと微笑まれてしまい、ルーシエラディアはいたたまれなくなつて顔を伏せる。

もじもじとドレスの裾を弄りながら、ルーシエラディアはボソボソと言葉を紡ぐ。

「私は…そんな、可愛いなんてことありえないわ。チビだし、ぺたんこだし、チビだし、雀斑あるし、チビだし…」

「今はまだ王妃様も十分な成長期も迎えておりませんからね。これからどんどん大きくなつていきますよ」

「だといけれど…、リリファスさん、私のお母様もお姉様も私くらいの歳の時はもう私の頭一つ分は大きくていらっしゃったらしいのよ」

「人により成長速度というのは変わります。王妃様の御母君と姉君たちは皆様早熟だったのでしょ。私の息子などは、王妃様の御歳くらいには、王妃様よりも小さかったですよ」

「え、そうなの！？あんなに大きいのに！！」

リリファスの息子であるジェローは今、王宮騎士の一人として陛下に仕えている。

身長は183センチとかなり大きく、ルーシェラディアはいつも彼と話す時は首を思いっきり上にあげなければならないのだ。いつも首が痛くて、しまいには彼はルーシェラディアと話す時にわざわざ身を屈めて話をしてくれている。

それなのに、小さい頃には私と同じくらいだったなんて……！！

「す、すごい！ねえ、リリファスさん、私もこれからあれくらい大きくなれるかしら！」

「い、いや……王妃様があんな愚息のようになる必要はないかと」

キラキラと瞳を輝かせるルーシェラディアにリリファスは少しばかり顔を引き攣らせる。

しかしルーシェラディアは瞳を輝かせたまま自分の身長が伸びることを心待ちにしているのか、ニコニコと笑っていた。

「私、なんだか希望を持てたわ……！よし、後でジェローにどうやって身長が伸びたのか話を聞いわ」

今にも走り去って行きそうな勢いをしたルーシェラディアをリリフ

アスはもう何を言っても聞くまい…と苦笑しながら彼女を見つめた。
ゴオオオ…！と、炎を背負いながらルーシェラディアは拳を突き上げる。

その姿は……とにかく王妃でもなく一国の姫でもなかったが、思わず微笑んでしまうほど可愛らしかった。

「リリファスさん、私、やるわ。そして陛下を驚かせてみせる！」

「それは…驚かないわけにはいきませんかでしょうなあ」

男性にしても陛下の身長は平均よりも高い。

しかしジェローは陛下に負けず劣らずの高身長。

もしもルーシェラディアがジェローと同じくらいの身長になってしまえば……驚かないはずがない。

まあ、女性であそこまで身長が伸びることはないだろうが…とリリファスは「やるぞー！！」と元気に叫ぶルーシェラディアを見つめた。

「しかし王妃様、陛下は王妃様がそこまで身長が高くならずとも良いと思いますよ」

「ダメよ。陛下はあんなに身長が高くていらっしゃるんだから…私

もそれに相応しくならないと」

相応しく…はならないかもしれない。あそこまでいくと。

しかし、ルーシエラディアがあまりに熱心に言うものだからそれは言えなかった。

「王妃様は本当に陛下のことを想っているんですね…」

想いの方向性には若干首を傾げる部分もあるが…

と、思いながらもリリファスは小さな王妃が陛下を思い考える姿に、笑みがこぼれる。

リリファスから見れば、城の者が影で呟いているような小さな王妃と陛下の歳の差が大した問題のようにも思えない。

人は遅かれ早かれ成長する。だから、今はたいそうあるようにも思える歳の差もすぐに埋まってしまっただらう。

だが、ルーシエラディアはカツと顔を赤らめた後にすぐさま全てを否定するかのように首を振った。

「想ってるだなんて…そんな！私はただ…この国の王妃として見苦

しくなりたくないだけだから!!」

「見苦しいなどと…そのように思う輩はいないと思いますが」

「リリファスさん、そんな慰めはいらないわ。私と陛下がいかにと地ほど違うかは私がよく分かってるもの」

「王妃様…」

「……大丈夫よ。それでも今は私がこの国の王妃だから、陛下の負担にならないよう、王妃として…相応しくなるよう頑張る」

そう言いながらルーシェラディアは小さな…何もまだ掴めていない自分の手を見つめる。

そう、今はまだ私が王妃だから…

リリファスは何とも言えない顔をしながら、それでも自らの手をじ

つと見つめるルーシェラディアを心配そうに眺める。
その姿はまだ年端もいかない十歳の娘の姿には見えない。
何かを決意するかのような光で瞳を輝かせて、ルーシェラディアは
リリファスに向き直る。
思いのほか力強い瞳に、リリファスは心配というよりは魅入られる
ようにその瞳を見つめた。

「リリファスさん、私頑張るわ。あの陛下に負けなくらい立派な
…王族として誇れるような姫になる…」

その瞳、佇まいこそが王族としてのソレを表しているようにリリフ
アスには見えた。
だがリリファスは口に出すことなくルーシェラディアの瞳を穏やか
に見つめ返す。

「楽しみにしております、王妃様…いえ、ルーシェラディア様」

小さな王妃はそれに対して、にっこりと笑みを深める。
その笑顔は、年相応の屈託なさに満ち溢れていた。

6話

リリファスと別れ、ルーシェラディアは青い顔をして帰りを待っていた侍女のもとへと急ぐ。

「王妃様！」

ルーシェラディアに気づくと侍女：ベリエは安堵の息を漏らしながら彼女に近づいてくる。

慌ててドレスに汚れがついていないかを確認して、裾に少しついた汚れを綺麗に洗濯されたハンカチーフで丁寧に拭う。

美しい刺繍が施されたハンカチーフを汚すのがしのびなくて、断ろうとしたが、それこそ恐ろしい顔で否定されてしまった。

「このような汚れくらい拭わせてくださいますせー！」

少し幼い顔をしたベリエが眉を吊り上げてルーシェラディアを不敬にならない程度に凄む。

普段は大人しく穏やかなベリエからはあまり見られないその表情にルーシェラディアは意思とは別に無意識に首を縦に振る。

それを見、満足げに頷いてからベリエはせつせとルーシェラディアの服についた袖を丁寧に拭っていく。

目立たない程度に落ちた汚れの代わりに、綺麗な白だったハンカチーフは無惨にも真っ黒になってしまっていた。

「ふー、なんとか汚れが見えないようになりましたね。早く部屋に戻りましょう。お召し物を替えないといけません」

「いいわよ、このままで。汚れなんて全然見えないし」

「いけません！見える、見えないの問題ではなく王妃様が汚れのついたお召し物を着ているのが問題なのです」

「でも服なんて着てたら、どうせ汚れ……」

「戻りますよ？王妃様」

ニコッ

笑顔で迫る圧力を防ぐ術なし。

ルーシェラディアは頬を少しだけ引きつらせながら、半ば追い立てられるように自室へと戻る。

「ベリエって…一人っ子…？」

「いいえ、私の家は五人兄弟ですわ」

「もしかしてだけど…ベリエって長女…？」

「はい、私は長女で五人兄弟の1番上なんです」

ああ、やっぱり…

すっかり出そうになった言葉を賢明にもルーシェラディアは手で口を抑えながら飲み込む。

「それが何か？」

「…なんでもないです」

ルーシェラディアは七人姉妹の末っ子だからよく分かっていた。上に逆らってはいけない、と。

特に上に姉が六人もいるルーシェラディアは、姉というものを1番よく理解している。

姉がいると言えば、ドレスやアクセサリー、夢心地のような夜会でのロマンス…様々な話を共有し、かつ楽しめるものだと言われているが…実際はそんな華やかさだけではない。

姉とはいえど三者三様、いや六者六様。

小国の姫とはいえ、彼女たちも一個人の人間。一人、一人の趣味趣向や考え方が違うのは当たり前である。さらに言えば、姉妹とはいえ女は女。

もし、気の強い、癖が一癖どころか二癖、三癖もある姉たちが六人揃えばどうなるか？

…まさしく、女の戦場が繰り広げられる。

ルーシェラディアは幼いながらも姉たちが数々の戦場を作り、または勝ち進んでいく姿を随時見せつけられてきた。

その中でもやはり威圧感というか…逆らってはいけない、と本能が警鐘を唸らせていたのは常に長女…つまり、第一王女であるグリフエローニヤだった。

グリ姉様は本当にすごかった…

グリ姉様との思い出は…正直にいうと思い出したくない。彼女は本当に…何から何までがすごかった。おそらくルーシェラディアだけではなく、他の姉様たちも同じように感じてはいるだろうが…。

ちらりと、すぐ後ろを歩くベリエに視線を上げる。

ベリエはルーシェラディアの視線に気付くと、にっこりと微笑みながら「どうしました？」と尋ねる。

「ううん、ベリエといると…ちょっと自国にいらっしゃる姉様たちを思い出してしまって…」

「王妃様には姉君がいらっしゃるのですか？」

「六人いるわ。1番歳が近い姉様でももう18になっているけれど…」

ベリエが目を見開いて驚く様子を見ながら、ルーシエラディアは、今や遠い地となってしまった自国に思いを馳せる。

皆、元気かな…

心配しなくても、あの姉様たちならば毎日を謳歌し続けていることだろう。

二番目の姉様であるシェリエナは確か三人目の子供を身籠ったと聞いている。

シェリエナの子供たちはルーシエラディアの甥や姪になるわけだが、実はルーシエラディアのほうが歳は少し若い。

だからあまり遊んだ記憶もないが、それなりによくしてもらったような覚えはある。

フィラベスタス国に来てからというもの、ルーシエラディアはいつも王妃教育の一環としてフィラベスタスの歴史や文化などを学び、さらには自国では習い切れていなかった一般教養の勉学に励み続けていた。

ひとえに、麗しい陛下に少しでも役に立ちたかったからという思いでやってきてはいたが、ルーシエラディアは今だ十歳の女の子。遊びたい盛りの年頃であることは否定できない。

時折の庭園散策や、（こっそり）騎士団の練習を覗きに行くぐらいしかしていないことにルーシエラディアは少し、いや、かなり不満も溜まっている。

だがそれを口にすることは許されないとルーシエラディアは理解している。

それは、この国に嫁ぐ際に姉たちからも始終言われたこと。

本来なら、ルーシエラディアがこの国に嫁ぐことは無理だった。だが…1番陛下とも年が近い第六王女…コルテシアが行くのが筋だったのだが、コルテシアには密かに想い慕う相手がいて、フィラベスタス国に嫁ぐくらいなら、と王族という身分まで捨てて恋人と駆け落ちまでしようとし、娘の強い想いに根を上げたルーシエラディアの父、つまり王は、第七王女であるルーシエラディアに白羽の矢を立てるしかなかった。

年も幼く、さらに変わり者という姫を大国であるフィラベスタス国に嫁がせるのには会議に会議を重ねて検討され、ついにはそのままルーシエラディアが嫁ぐ方向で話がまとまったのだ。

もちろん、ルーシエラディアやコルテシア以外の姫たちもいたが、それぞれ既に結婚していたり婚約していたりして空気がなかった。

婚約破棄をさせようという動きもあったが、そんなことは姉たちが許さず、その強い反発に疲れた王や貴族たちが半ばヤケクソ気味にルーシエラディアを打診した結果、フィラベスタス国から了承の意を経て、そこから矢のように月日が過ぎ、今に至る。

怒涛のように過ぎたあの数ヶ月間の記憶はほとんどなく、ルーシエラディアにとっては全く実感がわかないまま、あれよあれよという間にフィラベスタス国に輿入れをしてからようやく時間が経った頃に、色々と考えることができた。

考え始めてからが1番嬉しくて、そして1番辛かった。

あの人の妻になるという夢が叶ったことと、所詮は国の都合と利益を求めただけの政略結婚。そこには少女が大人になった時の夢として描くような愛は、全くといっていいほどないことがよく分かってしまったことでの悲しみ…

しかし、それではルーシエラディアが嫁ぎにこないほうが良かったのかと問えば、ルーシエラディアは即、否と答えるだろう。

あの人の隣に自分が立つのが相応しいとは思えない。

だが、違う人…例えば自分の姉だとしても誰かが隣に立つのを想像するだけで胸が痛かった…。

もっと自分が大人だったら、

もっと自分が美人だったら、

もっと自分が賢かったら、

考えれば考えるほど”もし…、”が増え、”もし…、”が増えられることに落ち込んだ。

だが、それも全ては考えても無駄なこと。

何もかもが、
あの人に劣っている自分を見るたびに悲しくなる自分はもういらな
かった。

ならば…

彼に相応しいように
彼の隣に並べるように

彼に……振り向いてもらえるように

やるだけのことは全力でしよう。
だけど、それでももし…
もし、これから彼に愛する人ができたならその時は…

「王妃様、王妃様」

「…あ、な、何？ベリエ？」

思考の海から浮上して、ベリエを見上げると彼女は小声で「カルサルーサ侯爵令嬢です」と告げる。
カルサルーサ侯爵令嬢と聞いて、ルーシエラディアは我知らず眉を潜める。

会いたくない人に会っちゃった…

ルーシエラディアは前方から歩いてくる集団を目にして、あちゃ〜と額に手を当てる。

カルサルーサ侯爵令嬢は、フィラベスタス国の大臣職にまでなっているカルサルーサ侯爵の一人娘であり、簡単に言えば陛下の側室だ。側室。

つまりは、ルーシエラディアとは地位は違えど同じく陛下の女であるということ。

側室が何たるかは、正直に言えばルーシエラディアにもよく分からないところがある。

だから側室が何人いようと別段気にすることなく、…と、いうわけではないこともないが、彼の令嬢に関していうとルーシエラディアは1番気に入らなかった。

気に入らない、などと身分の高い地位にいる者が軽々しく口にしてはならないとルーシェラディア自身も分かっているからこそ口には出さないが、心の中まで規制されることない。

「…早く部屋に戻れば良かった」

だが、会ってしまったて逃げるなどできない。

ルーシェラディアは小柄な身体を精一杯引き伸ばすように、姿勢を正す。

前から歩いてくる一団もルーシェラディアたちに気づいたのか、どこことなく胸を張るように歩いてきているように見えた。

平常心、平常心。

頭の中に素敵なことを思い浮かべるのよ。

素敵なこと…と言って思い出されるのはつい先日フィラベスタス王宮の、世界でも随一と言われる巨大図書館で発見した『血みどろの男爵と銀の刃』は、まさに名作だったとルーシェラディアはウンウンと一人頷く。

『血みどろ男爵と銀の刃』

作者不明、しかしその精密な描写と大の大人ですら震え上がらせるほどの恐怖と怪奇に満ちた想像に次ぐ想像は、まさに伝説的ホラー

小説といっても過言ではないほどにすごかった。

あまりのグロさと怖さに出版禁止されていて、小国であるルーシェラディアの国でも、もちろん見る事が叶わなかった。

しかし、さすがは巨大図書館。

まさかの出版禁止作品の宝島である。

掘れば掘るほど出てくる宝石たち（『ホラー小説』に、ルーシェラディアは狂喜乱舞した。

文字のごとく踊り狂い、さすがに人通りが少ないとはいえばやばいとファビラやダキアスからお叱りを受けた時でさえ顔中に広がる笑みを押し止めることはできなかった。

というか押し止めるつもりもなかった。

楽しいことを楽しんで何が悪い。と、いうのがルーシェラディア的な心情だった。それというのも楽しいことは全力で楽しみなさい！と口癖のように言っていたのは確か第四王女であるアグラシア姉様だった気がする。

アグラシア姉様は何事にも”全力”な人で、ルーシェラディアが城下に遊び歩いていたの容認してくれていたのも彼女だった。今は何をしているかは分からない。分からないが、きっとアグラシア姉様なら、「全力を尽くさなくて何を尽くしますの！」とどこか広い空の下で叫んでいるに違いない。

…と、話がそれた。

とにかくルーシェラディアも彼女の教えに従い…というほどでもないが、楽しいものは全力で楽しむ、という信条のもと過ごしていた。それを含めた社会勉強、もとい城下遊びはルーシェラディアにとってはとても大切なことだ。だが、それ故に”変わり者”と貴族たちからの偏見の目に非難を受けていたわけだが…。しかし悪いことに、このフィラベスタス国は貴族の特権階級意識が、他国と比べてもかなり高い。

国というものを最前線で背負う貴族は、それを意識しているからこ

そ誇りや尊厳を持つことを幼い頃から教育され、自らその責任を理解するよう育つ。だが、少しでも道を間違えるとそれはプライドが高く、誇りの意味を履き違えた傲慢なだけの輩が出てくるのも必須。フィラベスタス国はまさにそれが強かった。

特権階級意識に凝り固まった人間とルーシェラディアは相容れたことがない。

そして、カルサルーサ侯爵令嬢においてはまさにそれを体言したかのような人物で、のっけからルーシェラディアと折り合いが悪かった。

最初にルーシェラディアが彼の令嬢と顔合わせをした時のことは、ルーシェラディアにとっては苦々しい記憶として今だに残っている。あちらからしたらルーシェラディアのような田舎国の小娘が憧れてやまない麗しの陛下の妻となっていることを憎たらしく思っているのだろうか…

「分かつてはいるけどね、私も…」

7話

逸らしたくなる顔を無理に上げながら、ルーシェラディアはあと数歩の近くにいたる歳の割には色気のある少女を見上げた。

見上げなくちゃならないのは、限りなく残念なことだがこればかりはどうしようもない。

卑屈にだけはなっちゃいけない、と自分に言い聞かせながらルーシェラディアは、少女を見上げながらにこやかに挨拶を交わした。

「ご機嫌よう。レイアーナ」

「おはようございます、王妃様」

レイアーナ・カルサルーサはほつそりとした長い指を口元にあてながら上品に微笑む。

歳は17と聞いたが、その仕草はとてもではないが歳よりもさらに旬を迎えた女の色気が滲み出ている。

この国の結婚適齢期は16〜20だという。そう考えると、17というのはまさにピッタリ、しかしまだ新芽である初々しささえあるはずなのだが、レイアーナは新芽を通り越してすでに艶やかな花を咲かせているようにルーシェラディアには思えた。

さらに、レイアーナはルーシェラディアが王妃として嫁入りしてくるまでは有力な王妃候補として、すでに後宮入りを果たしていたら

しい。

側室といえど、陛下が婚姻をあげないうちに息子、または娘でもいいが陛下の御子を身籠れば王妃という地位が与えられる。それゆえ、1番陛下のお渡りがあるレイアーナは王妃候補の筆頭と言われているのだが、ルーシエラディアが嫁いだことでそれは潰えた。だからこそ、彼女はルーシエラディアをなおさら憎々しく思うのだろう。しかし、それでもレイアーナは今でも変わらず陛下のお渡りがあることをルーシエラディアは知っている。

”お渡り”の深い意味は、まだ時期が早いということでも詳しく教えられてはいないが、なんとなく…こう、感じるものはあつたし、羨ましいと思うのは陛下が部屋に来てくれる、ということだ。

ルーシエラディアの部屋に、陛下が来て下さったのは一度しかない。結婚式の夜、通例だと言われて陛下が夜に訪ねて来て下さった。あれよあれよと、いつの間にかこの国に来ていたルーシエラディアにとって、初めて息をついた日であり、初めて陛下とお話した日でもあった。

結婚式の時も、その前も忙しくて陛下と話す機会はなかったから、その日は陛下と夜通しで話をした。最初は緊張したけれど陛下はその容姿もさることながら、博識で話上手、聞き上手で時間が経つにつれてだんだん緊張も解れ、とても楽しく話ができた。そしてそろそろ瞼が落ちてきそうになり、もう寝ようと話を終いにしようとした時に陛下は…とても、真剣な顔で言った。

国が違えば文化も違う。

戸惑うことも慣れないことも多いと思うけど、これからフィラベスタス国を第二の故郷と思って過ごして欲しい…と、わざわざ美しい陛下が頭を下げた、あの時。

…私はフィラベスタス国を、あの陛下が治め、守り、慕うこの国を全力で支えていこうと誓った。

未熟だけど、

まだまだ子供だけど…

それでもこの陛下の役に立ちたいと強く思った。

あれ以降、陛下とは何度か夕食を共にしたり時折開くパーティーでお会いする以外に接点はない。

陛下はお忙しいし、王妃とはいえ小娘を構ってる暇がないことも分かってる…けど、

レイアーナや、側室たちのもとへ渡る時間があるなら…一度でもいいから来て欲しい…

口には出さないけど、むくむくと沸き上がるこの気持ち。

目の前で小馬鹿にするように微笑むレイアーナを、恨みがましく見ないように全神経を顔筋に集中させながらルーシェラディアは微笑んだ。

「本当に偶然ね、レイアーナ。お元気かしら？」

「ええ、王妃様もお元気そうで何よりですね。…まあ、お元気すぎるところもあるようですが」

チラリと動く視線が向かうのは、少しばかりのシワが寄ったドレス。ベリエがあの時汚れを拭き取ってくれなかったら…と思い、ルーシ

エラディアは心の中でベリエに感謝する。

「今日はお天気も良いから、少しばかり気持ちが浮かれてしまつて…。レイアーナは、これからどちらへ？」

「陛下とお茶をする予定ですの」

瞬間、顔の筋肉が一瞬だけ強張る。
それを察しられないように気をつけてはいたが、レイアーナの目が
みるみる優越感に満ちて行く。

「先日、陛下が私のもとへ訪問して下さりお誘いを受けましたのよ。
私が最近気を伏せているのでは、と陛下がご心配して下さって…ふ
ふ、本当に陛下はお優しいかたですわ。ねえ、王妃様？」

「…そうね、陛下は本当にお優しいかただわ。素晴らしい気晴らし
になるといいわね、レイアーナ」

「ええ、私、陛下といるだけで大変気持ちが安らぎますの。…陛下
もお忙しいかただから、あまり手間を取らせたくはないと思つては
おりますが、陛下もたまにはお茶を飲んでお休みになるのも良いで
しょうし」

陛下は忙しいけど、私のためならその合間の時間と一緒にお茶を飲んでくれるのよ…

レイアーナの勝ち誇った笑みを見ながら、ルーシエラディアには彼女の高らかな笑い声が頭に響いてくるような気がする。

女はいつ如何なる時も気丈であれー…

姉たちの言葉を思い出しながら、それでも笑顔は絶やさない。

胸の内から沸き上がる衝動を抑えながらもレイアーナの顔をニッコリと見上げた。

「そう、陛下にとっても気晴らしになってくださるなら嬉しいわ。楽しんできてね」

「ええ、もちろん。でも王妃様もたまには陛下のこと構って差し上げたほうが良いのではないかしら？今はまだ幼くていらっしやるから遊ぶことも良いとは思いますが、貴女はあの方の妻ですからねえ…」

クスクスと品だけは良く笑いながら、レイアーナは「ご機嫌よう」と去って行く。

「クスッ、王妃とはいえまだまだお子様ですもの」

「陛下というよりもそこらへんの野草と遊ぶほうが楽しいのよ、きつと」

「陛下のお相手にはやはりレイアーナ様が一番ですわよね」

「そうよ、あんなお子様王妃を相手にしたら陛下が疲れてしまっわ」

後から続く侍女たちの悪意ある囁き声が、ルーシェラディアの耳に次々と入ってくる。

「あの子たち…っ、王妃様に向かって何て失礼な…!!」

「ベリエ…いいの。ここであまり争いを起こしたくないわ」

後ろに控えていたベリエの目がキリキリと吊り上がり、侍女たちに怒鳴りかけるのをルーシェラディアは小さな声で制した。

「ですが！王妃様に対してあのような発言をするなんて…無礼にもほどがあります…!」

「でも…言い返せないわ。何も。彼女たちの言っていることが当然なのは、私がよく分かってる…」

「王妃様…っ」

「…帰りましょう、ベリエ。少し、疲れたわ」

弱々しくも笑顔を浮かべ続けるルーシエラディアに、ベリエの顔が
齒痒そうに歪む。

それでも、ベリエはルーシエラディアの意を汲んで最後には「分かりました。帰りましたら王妃様の好きなココアを入れますね」と柔らかな声で眉を下げてくれた。

それに安堵しながら、ルーシエラディアも「お願いね」と囁く。

ルーシエラディアの小さな背中に突き刺さる刺は、鋭利さを持って深く彼女の心にまで届いていた――…

8話

「ルーシェラディア？どうしました？」

「え…？あ…」

心配そうにこちらを見るキリクの顔があつて、ルーシェラディアはハッと顔を上げる。

「すみません、ボーツとしてました…」

「いえ、それよりも大丈夫ですか？先程から食事があまり進んでいないようですし…どこか具合でも悪いのですか？」

伺うように首を傾げるキリクに、ルーシェラディアは慌てたようにブンブンと首を振った。

「具合が悪いとこなんてないですっ！元気です！」

勢い込んで言ったためか、キリクは一瞬ビックリした顔をしたが探るようにルーシェラディアを見つめた。

「…そうですか？それならば良いのですが、あまり無理はしないで下さいね」

微笑む彼の顔に、ルーシェラディアの胸の内でぐるぐると混ざり合い、攻めぎあう何かが勢いを増す。けれどもそれを押さえ込むように努力しながら、ルーシェラディアも笑顔を返した。

（笑顔、笑顔…）

「ありがとうございます、陛下。」

当たり障りのない会話。

それが唯一許されるこの一時。

とても嬉しい時間のはずなのに、とても悲しい時間のような気がする。

脳裏に浮かぶ彼の側室の勝ち誇った顔。

あの時、ぐちゃぐちゃに掻き乱された心は今だ治まることはない。

ドキドキと鼓動を感じるのは久しぶりにお会いした陛下に対する胸の高鳴り…ではなく、全てを、自分の内側の端から端まで…黒く醜い感情がうごめく胸の奥を…見られたくないから。

本で見るような恋の高鳴りの裏側の醜い感情。

それがどうしようもなく不快で、悲しくて、ルーシェラディアは早

く自室に戻りたくなり食事もそこに席を立つことにした。

「ルーシエラディア？」

「申し訳ありません、陛下。わたくし、やはり少し気分が優れないので先に自室へ戻らせて頂きます」

「君の大好きなデザートがもうすぐに来るのに？」

驚く陛下をよそに、ルーシエラディアは小さく首を振ってから精一杯の笑顔を作って微笑む。

「お腹がいっぱいなんです。では、失礼いたします。陛下」

礼をしてルーシエラディアが退室すると、後ろで控えていたファビラも続こうとする。

だが、それをキリクが引き止めてファビラはいつもの表情の無い顔をいささか不機嫌そうに眉を潜めながら振り返る。

「何か御用でしょうか」

「用という用はないのですが…ルーシエラディアの様子が少々気にかかりまして…。彼女はどうしたのです？いつもの元気もなく、ど

「こか具合が悪いのでしょうか？」

「…それを貴方が言いますか、陛下」

ファビラは険ある眼差しを隠しもせず、はぁ、と重い息をつく。

本来ならば一国の王に対してとる態度ではないが、ファビラにとつての主はこの王ではない。最低限の礼儀は取るにせよ、今のファビラにはそれ以上の礼をこの王に立ててやる義理など毛頭なかった。

「陛下、陛下はなぜルーシェラディア様の室に参られないのですか」

質問を質問で返され、一瞬キリクは虚をついた顔をするが次には困惑したような顔をしてファビラを見つめた。

「質問の意図がよく見えませんが？私はルーシェラディアの具合がどうかと聞いているんです。ルーシェラディアはこれでも私の妻ですし、どこか具合が悪いようならすぐに医師に見せたほうがー…」

「ならば…、ルーシェラディア様を妻とお思いならば、なぜ陛下は直接ルーシェラディア様を見舞い、様子を聞いて下さるうとしない

のですか」

キリクの言葉に重なるようにファビラが言葉を発する。

近くにいた給仕係たちはあまりに不敬な態度をするファビラに顔を青ざめさせつつ、ハラハラと二人の様子を見守っていた。

「先程聞いてみましたが、ルーシェラディアは何も話そうとしませんでした。それならば私がルーシェラディアを見舞ったところで何も変わりはないでしょう。彼女は私に何も話してくれませんから」

「変わらないなどと…勝手な決めつけですね。それに、何も話してくれないというのはルーシェラディア様ではなく、貴方のほうでしょう?」

「…どういっことでしょう?」

キリクの纏う空気がひんやりと冷気を含み始める。いつもの穏やかな笑顔はそのままだが逆にそれが彼の纏う雰囲気とミスマッチで余計に気味悪さが目立つ。しかし、ファビラはそれに気付きつつも動じることなくキリクの穏やかに緩む口元を見つめた。

「どういつことも何もないでしょう。…陛下は本当にルーシェラディア様を妻と思って下さっているのですか」

「当たり前です。私とルーシェラディアは正式な婚姻を果たしたのですよ」

「確かに婚姻は果たしました。ですが、貴方がルーシェラディア様を本当はどう思っているかは、別です」

「一体どういつ…」

「ルーシェラディア様に、義理や、嘘の優しさなど必要ありません。それならば何もかけないで下さい。そのような仮初めを与えられ、ルーシェラディア様が苦しむのを見たくはない…」

最後は消えるように呟く。

大切な、とても大切な小さな主を思い浮かべながらファビラは目の前にいる男を睨みつける。

「これ以上、ルーシェラディア様の御心を傷つけることは許しません。中途半端な気持ちも、思いやりも全て… 必要ない。本当にルーシェラディア様を心配して下さるならば、貴方が直接ルーシェラデ

イア様を訪れるのが筋というものでしょう。貴方がいうように、ルーシェラディア様が貴方の妻である……というのならば」

全てを言い切った後、ファビラは話は終わったとばかりに背を向けて退室してしまった。

残されたのは重く、冷たい沈黙だけ。給仕係たちはこの場に居合わせってしまった自分たちの不運を嘆きながら、じっと押し黙ったままのキリクを横目でちらりと見遣る。

「……はあ、厄介な」

小さく囁かれたキリクの言葉は給仕係たちには聞こえない。

ふー……と息を吐き出すキリクを恐々と伺っていたが、顔を上げたキリクの顔がいつも通りの優しい面立ちになっていて、先程の気まずく、重苦しい沈黙をものともしていないようだった。

「私も退室しよう。……ああ、そうだ。料理長に、今宵のデザートは王妃の部屋に届けるよう伝えておいてくれ」

変わらない、穏やかな声の主に安堵しながら給仕係たちは素早く自分たちの仕事に戻っていく。

その間に食堂を静かに退室したキリクは不意に廊下の窓から差し込む月明かりに目を細める。

満ち欠けを繰り返す月は、いつになれば本来の自分の姿を見つけられるのだろうか。

太陽のように常に不変ではない月。

日により移りゆく、その危なかしさはどこか哀れで、どこか心惹かれる。

「義理や嘘の優しさ…か」

偽る姿はもう慣れた。

いや、慣れたというよりもどれが偽りでどれが本当のものを判断できなくなったというほうが近い。

一つの形に留まらず、その危うげな脆さを隠し、常に変わり続ける月の姿…。

どれが月の偽りの姿で、どれが本当の月の姿かは誰も分からない。そしてそれは恐らく、月さえも――…

「全く面倒なものだな…」

欠けゆく月を見ながら、キリクは自嘲するように笑う。

「月と、太陽は分かりあえない。月と太陽は…違いすぎるんだ、何もかも…」

頭に浮かぶのは、常に変わらない笑顔と元気さを持つ一人の小さな、

小さな少女。何事にも健気で、いつも笑顔の明るく幼い彼女。
キリクは深い溜め息をつく、ゆったりとした足どりで執務室まで
の長い廊下を歩き出す。

欠けた月明かりに照らされたキリクの影が、しんと静まり返った廊
下に長く長く伸びていた。

「申し訳ございません、ルーシエラディア様」

食堂から退室してすぐ、ルーシエラディアが部屋でナイトウェアを
ベリエに手伝ってもらいながら着替えていた。そして、しばし遅れ
てファビラが部屋に入ってきたのだが、ファビラは部屋に入るなり
いきなりルーシエラディアに向かって頭を下げる。

ルーシエラディアは訳が分からなくて、背中についているリボン
をベリエに結んでもらいながらファビラに顔を向けた。

「一体どうしたの、ファビラ。いきなり謝られても訳が分からない
わ」

「私は臣下の身分でありながら…主君であるルーシエラディア様に
命じられていないにも関わらず、勝手に王に進言させて頂きました」

「王って…あの人に？」

まさか、とルーシェラディアは目を見開くがファビラは神妙な顔をして頷く…相変わらず表情にほとんど変化という変化は見られなかったが。

「一体、何を言ったの？」

「…ルーシェラディア様の御心を二度と傷つけるな、と」

「ファビラ、あなた…」

ルーシェラディアがさらに大きな瞳を見開くのと同時に、パチパチと横で手を叩く音が聞こえる。

「ファビラさん、よくぞ言っておきました！！もう、私も陛下に常日頃鬱憤が溜まっていましたから清々します！」

本来ならベリエはフィラベスタス国の人間であり、その敬愛する王に元は隣国の侍女であるファビラが物申したとなれば眉を潜めるに違いない。…はず、なのだがベリエは笑顔でファビラに拍手を送っていた。

「あの陛下はルーシエラディア様というものがあらながら、ほいほいほいほい他の女と今だに交流したりして！そんなことをするからあの性悪令嬢が我が物顔で後宮を練り歩くんですよ！」

どうやらベリエは先日レイアーナ嬢とのやり取りが今だに腹にすえかねているらしい。

ルーシエラディアのリボンを結ぶ手伝いをしつつプリプリと怒りながら、散々あの令嬢付きの侍女が生意気で礼儀知らずかの文句を繰り返していた。

「全く、あいつらときたらルーシエラディア様がれっきとした王妃だっというのに…ブツブツ」

「ベリエも相当腹を立ててたのね…」

ルーシエラディアは苦笑すると、目の前で頭を下げたままのファビラに目を向ける。

「ファビラ」

「はい、ルーシエラディア様。ルーシエラディア様の意向を伺いもせず、勝手に王に進言したことを許してくれとは申しません。私は後悔もしておりません。ですから、如何様な罰も受ける気持ちでございます」

「如何様な罰、ね…。そうね、貴方の気持ちは嬉しいわ、ファビラ。私はずっと…気落ちしてしまっていたから…心配させてたのも分かったの。ごめんなさい、ファビラ」

でも、とルーシェラディアが静かな声で続ける。

「それでも貴方は私の侍女でもあり、この国に私が籍を移してからはこの国の侍女でもある。だから、侍女である貴方が勝手に王に進言することは、貴方が私の侍女である限り黙認することはできない」

愚痴オンパレードを繰り広げていたベリエも、口を閉じてルーシェラディアとファビラを心配そうに交互に見遣る。

「だから、貴方にはそれ相応の罰を与えなくてはいけないわ。ファビラ」

「存じています、ルーシェラディア様。如何様な処罰も受けるつもりです」

「…そう、ならファビラ・コルベス。貴方に一週間の、謹慎を命じます」

ファビラはすぐに御意、と頷くがベリエはルーシェラディアを懇願するように見つめる。

「ルーシェラディア様、確かにファビラさんは出過ぎたことをしてしまっただけかもしれないですけどそれは一重に―…」

「良いのです、ベリエ。私を罰しなければならないのは必須。これくらいは当然のことです」

当のファビラに言われ、ベリエも仕方なく口を閉じる。

ルーシェラディアはベリエに全てのリボンを結んでもらって着替えた、ふんわりとした可愛らしいナイトウェアを引きずりながら、ファビラのもとへと歩み寄る。

「ファビラ。謹慎ということは貴方には一週間侍女としてこの室に入ることは許せない」

「はい、ルーシェラディア様」

「…だけど、私の友人としてならこの室に来て構わないわ」

ファビラがハツと顔をルーシェラディアに向けると、ルーシェラディアは優しく目元を緩ませながらにつこりと微笑む。

「私のために、そう言ってくれるのはファビラ、貴方くらいよ。本当に嬉しいの。ありがとう…」ファビラ、私の大切なお友達」

「ルーシェラディア様…いえ、ルーシー様…」

「ダメよ。お友達なんだから様付けなんて必要ない。…ルーシーでいい、って言ってるでしょ？」

ウィンクして笑うルーシェラディアは先程の”主君”という様とは違い、年相応の子供のようだ。

変わり身の早い、そして最初からルーシェラディアはこうするつもりだったのだと気づいて、ファビラは、呆れたように顔を覆う。だが、全ては大切な主の意向。

それに逆らうことなどできるはずもない。

「…分かりました、ルーシー。明日からは友人としてこの室に参らせて頂きます」

「お友達が”参らせて”なんて言うのは変。それを言うなら遊びに来る、でしょ？」

にやにや笑うルーシエラディアに、ファビラは隠しもせずに眉を寄せる。

それをルーシエラディアは面白がっていると分かっているのだが、ファビラの無表情を唯一動かせることができるルーシエラディアにファビラがどうすることもできないのは明らかだ。

この方は、本当に…

明日、ファビラと何して遊ぶか考え始めるルーシエラディアを見ながらファビラは不意に窓の外を見上げる。

浮かぶの三日月よりもさらに欠けた月。

満ち欠けを繰り返す月は気まぐれに闇を照らす。

「ルーシエラディア様は月というより、太陽のような方ですね」

いつの間にかファビラの横に立っていたベリエが、同じくルーシエラディアを見つめながら独り言のように呟く。

「…そうですね。あの方は、太陽…いえ、今はまだ陽だまりの粒とでも言いましょうか…とても、温かく優しい方です」

そう、

小さな光の精霊を身に宿したかのような小さな姫君。

ファビラはゆっくりと目を閉じて心に誓う。

自分がどうなろうと如何なる者にも、この小さな、温かい光を決して陰らせたりはしない――と

9 話

貴方の瞳には何が映っているの？
貴方の心の中に私はいるの？

貴方の心が知りたい。
貴方の声で私を呼んで欲しい。
貴方の瞳が映す全てを私に――…

「……ん、」

瞼をそつと開く。
ぼんやりと映る視界は真っ暗だ。ベッドサイドに置いてある燭台の
蠟燭の火は消えている。
のっそりと起き上がり、辺りを見渡す。
次第に夜目が利くようになってきたが、どうやらまだ朝にはなっ
ていないらしい。

「……みず……」

頭ははつきりとしなない。

臉を擦りながら、ベッドの上をもそもそと動きサイドテーブルにある水差しに手を伸ばす。

コップが見当たらず、仕方なしに水差しに入っている水を直接飲む。こくり、こくり…

渴いた喉を潤す冷たい水はとても心地良かった。

水差しの中の水が全てなくなって、ぼんやりとしていた頭も大分はつきりしてきた。

辺りを見渡すが、やはりまだ夜中らしい。

シン、と静まり返った部屋は、いつも過ごしている部屋とは思えないくらい…温かみがないというか、他人っぽい。

そのまま部屋を見渡していたが、ふと部屋の窓から差し込む一筋の光が目について、そっとベッドから立ち上がる。

光に導かれるように、ふらふらと寄って行き…カーテンを開ける。

「……月？」

三日月よりもさらに欠けた月。

しかし闇の中で小さな星たちとともに輝こうとする月に、ルーシェラディアは一瞬見とれる。

そつえば、とルーシェラディアは月を見上げながら思う。

あの人もお月様みたいだ、と。

賢王と言われ、民に望まれ愛される王。

優しい口調と洗練された容貌をした完璧な王。

だけど…どこか危うくて、脆い…儂げな印象がある…私の夫。

星たちに囲まれて、彼らといると一層光輝いているように見えるのに…何故か寂しげでポツンと浮かんでいるようにも見える月と彼は似ているような気がする。

ふと、部屋の中央に置いてあるテーブルの上にある籠に積まれたネブルーという果物を見遣る。これは、夕食の席で私が元気がないように見えたから、と陛下から夕食のデザートと共に贈られてきたものの。

ネブルーの原産地は、ルーシェラディアの故国だ。甘酸っぱいネブルーはそのまま食べてもいいし、もちろんタルトにしてもとても美味しい。ルーシェラディアの好物の一つであるネブルーは、この国に来てからあまり食べれなかったので籠いっぱいに入ったネブルーはとても嬉しい…そう、嬉しいのだ、もちろん。

籠に積まれたネブルーを一つだけ手に取る。

手に取っただけで、瑞々しい張りや艶をしている上等なネブルーだとすぐ分かる。

「どうして…」

呟いた声は弱々しい。

自分の声ではないみたいなのソレにルーシェラディアはグツと唇を噛む。

続きを言うことはできない。

だって、続きを言ってしまうばそれを求めてしまうことを知っているから。

私はお飾りの王妃。

それは誰もが知っていること、そしてそれを一番分かっているのはこの私……。。

どうしたらいいのか、それは自分にもよく分からない。

王妃教育を受けて、あの人に見合うだけの王妃になることであの人と、あの人の治める国を支えようと思った。

でも…、お飾りだけの王妃に果たしてそれは必要なこと？求められていることなのだろうか…？

陛下はこの国を好きになつて欲しいと、この国を自分の故国のように思つて欲しいと言つた。

確かにこの国を、この国の人々を愛したい気持ちはあるし、実際に好きな人たちもいる。

けれど…

この国は私を必要としてる？

私を…受け入れてくれる？

答えは…

そつと目を伏せてネブルーの香りを嗅ぐ。

ほんわかと香る柑橘系の香りが少しばかり感傷的な気持ちになっているのを和らげてくれる…そんな、気がした。

「ねえ、ダキアス。クッキーを渡してくれた？どうだった？」

「美味しかったって皆言ってますよ。あれって姫様が自らお作りになったんですね？」

「当たり前よ。料理長に教えてもらって一人で作っただから！」

実際には王妃様の手を煩わすことなんてできません！！と言い張る料理長を宥めすかそうとしたが失敗。苦肉の策としてこっそり厨房に潜んでやろうとしたが、あえなくバレてしまい厨房の出入り禁止を言い渡されそうになったが、なんとか頼み込んでその熱意に（というか、ずっと付き纏うしつこさに）料理長が折れて、料理長の監視、指導のもとで作ることができた。なんとも作る工程に時間がかかったものだ。

だが出来栄に関しては料理長のお墨付きを得るほどに成功した。ダキアスに、兵士たちに匿名で渡すように告げたのだが…

「あー、良かった。うまくできて」

「さすが姫様。皆、姫様のファンになりましたよ」

「馬鹿ね。匿名なんだから誰が作ったか分からないでしょ」

「え？姫様が作ったって言うちゃいましたけど」

「……………え？ちよつ…何してるのよ!？」

ルーシエラディアが驚いた顔をするのもお構いなしに、ダキアスはファビラが入れたお茶を飲みながら茶請けの菓子をほうばっている。…護衛だよね、一応？という疑問が頭の中をかすめないわけではなかったが、ルーシエラディアは睨みつけるようにダキアスを見つめる。

「むー…黙っててって言ったじゃない」

「いやあ、初めは黙ってようかと思ったんですけど、あいつらがあまりに作り手を聞いてくるものですからねえ」

「もーっ!!だからって言わないでよつ。あゝっ…恥ずかしいよ」

頭を抱えるルーシェラディアにダキアスは「いいじゃないですかあ。皆喜んでたんですから」と、へらへら笑う。

ルーシェラディアが唇を尖らせているが、ダキアスは素知らぬ顔でお茶を飲む。

だが、後ろから突然振り下ろされたお盆がそのままダキアスの頭を直撃して、彼は口からブツとお茶を噴き出した。

「うわっ！ダキアス汚いっ！」

「げほっげほっ……ひどいです。少しは心配して下さいよ」

咳込み続けるダキアスの後ろには、お盆を手にしたまま冷たい目をして立っているファビラがいた。

ダキアスは振り向き、ファビラが手にしているお盆を見て、今だ痛みが残る頭を押さえる。

「痛いんですけど」

「ルーシーの願いを無下にするとは…何考えてるんですか。ていうか、私がルーシーのために用意したお菓子なんですけどね？」

皿の上にたっぷり積まれたはずのお菓子は、すでに半分近くなっていた。

ついでにダキアスはまた新しいお菓子の一つを手になっている。

「あー…うまいですよ、これ」

「それは良かった。さあ、ルーシー。もっと食べて下さいな」

「ありがとうございます」

「じゃあ俺も…」

「貴方はダメです」

お菓子に手を伸ばそうとしたダキアスの手をファビラが叩き落とす。
いたゝ…と赤く染まった手の甲を振りながら、ダキアスはちえっと舌打ちをする。

ルーシェラディアは二人の様子を見ながら、クスクスと笑いを漏らした。

「二人は仲良しね」

「どこですか」

ハモる二人に、ルーシェラディアはさらに笑みを浮かべた。

「やっぱり仲良し」

ファビラとダキアスは互いを見つめあう。…もちろん、甘い空気などはない。

ファビラが一方的に冷たい目をしてダキアスを睨みつけ、ダキアスは淡々い笑みで（少しばかり引き攣りながら）ファビラの冷たい目を見返している。

「いいわねえ、そんなに見つめあっちゃって」

「いや…姫様？これ、見つめあうとかじゃないんで。むしろ俺、視線で人を殺せるなら何回か死んでますよ」

「まあ…照れちゃって」

照れてないっ！と、ダキアスが叫ぶのをルーシェラディアはウフフと微笑みながら見ていた。

「ルーシー、私も不快です。こんなのと仲良しだと言われるなんて…人生の不覚以外の何物でもありません」

「その言われようはさすがに傷付くって!」

「勝手にどうぞ」

「ひどっ!めちゃくちゃひどくね!? 姫様どう思っよ!」

「うん、頑張ってね。ダキアス」

「うわゝ笑顔で放置されんのが1番効くんですけどー…」

ガツクリとうなだれるダキアスに、ルーシエラディアは少しでも可哀相になってファビラに注意する。

「ダキアスをあんまり虐めちゃダメよ、ファビラ。ダキアスは意外と傷つきやすいんだから」

「分かりました。そういえばダキアスは肝っ玉の小さい軟弱野郎でしたからね」

「…本当に泣いちゃいますよ、俺?」

泣きまねをするダキアを見て、ルーシェラディアとファビラは互いに目を合わせるとクスクスと微笑んだ。

こうやって三人でふざけてお茶を飲むのは故国でもよくあった。ファビラとダキアスは歳も近い幼なじみのような関係で、小さい頃は二人してルーシェラディアの遊び相手となってくれていたのだ。

こうやって三人で話していると、ホツとする…。

この時間があるから私は笑っていられるんだよね。

もしも、ファビラやダキアス。一人でも欠けてしまえばとてつもなく寂しかっただろうな、と思う。

寂しくて寂しくて泣いて暮らしていたかもしれない。

一人ぼっちの見知らぬ異国の王宮の奥深くで…。

ブルリと身震いしてしまった身体をそつと抱きしめる。

ダメだな…私。

二人に頼ってばかりじゃられないのに…。

急に黙り込んでしまったルーシェラディアに気づいた二人は、今まで続けていた言い争いを止めて心配そうにルーシェラディアを見つめる。

「ルーシー、どうしました？」

「姫様、急に元気がなくなりましたよ？」

「ううん、何でもない。二人とも…大丈夫」

ふんわりと微笑むルーシェラディアに、ダキアスもファビラも彼女が無理をして笑っているのだと知る。

だが、それをつ込むようなことはしなかった。彼らの姫は、小さいながらも自分の殻に閉じこもる癖があるのを知っているからだ。本当なら殻なんて箆らせるのはよくない。けれど、ルーシェラディアの頑固さは折り紙つきで彼女のその癖は彼女の最強（凶）姉君たちも手を焼いていたものだった。

「…あんまり考えすぎないようにしないといけませんよお、姫様は」

「…ん、ありがと。ダキアス」

しつこく聞き出そうとしない二人の優しさをルーシェラディアもよく理解している。

だからこそ二人にあまり頼ってはいけない、自分も強くならなくちゃと思わされる。

大切だから…負担にはなりたくない。迷惑を、かけたくないのだ。それが二人にとっては、負担でも迷惑でもないにしても…。

「ところで姫様。これは？」

「え？」

ダキアスの指差す先にあるソレを見て、ルーシェラディアは「ああ…」と俯く。

「これは、…余りもの」

「余りもの？」

「うん…、クッキーね、余分に作りすぎちゃったの」

丁寧にラッピングされた手作りクッキー。

本当は…余ったわけではない。

渡す予定の相手はいる…否、いたのだ。

だけど…渡せない。

渡してもきつと受け取ってはもらえらると思つ…あの人は、陛下は…お優しいから…。

でも、喜んではもらえないような気がする。

クッキーを作ること、淑女のマナーには反すること。

陛下は…呆れるかもしれない。

ちつとも王妃らしくない、ましてや淑女でもない、チビで子供っぽ

い自分のことを。

それが、怖い。

だから渡せない。

ルーシエラは、ラッピングされたクッキーの包みを手に持ちながら目をつぶる。

私は、陛下に拒絶されたくない…臆病者なんだわ。

食べて欲しくて作ったはずなのに、渡すのが怖い。
相反する気持ちがあるルーシエラディアの心の内でぶつかり合い、どうしても行動に起こせない。

「ダキアス、良かったら食べる？このままにしておくのももったいないし…」

「おつ、それはラッキー…って言いたいところですが、姫様。そのクッキーは受け取れませんよ。だって、そのクッキーは別の人が食べるべきものでしょう？」

「別の人なんて…」

言い返そうとしたルーシェラディアだが、慌てて部屋に入ってきたベリエによってそれは防がれる。

「ルーシェラディア様！」

「どうかしたの？ベリエ」

「へ…」

「へ？」

「陛下が、こちらに参られるそうです！」

その時、ルーシェラディアの小さな唇が息をひゅつと吸い込む音をファビラとダキアスは聞いたような気がした。

10話

ベリエが告げに来てからは慌ただしかった。

まずは着替え。

どうも陛下の来訪があるのとないのとは衣装を変えなくてはいけないらしい。

これが結婚し、王妃教育を受けているルーシェラディアの今だ答えが分からない疑問点だったりする。

別に、綻びがあつたり、泥にまみれているわけでもないのに何故に着替える必要があるのか。

もちろん乙女心としては常に綺麗な服を身につけていたい…好きな人の前では。

ただ、ただ…だ。

「ルーシェラディア様、行きますよ!」

「…来い!!!」

ふー、と息を吐き出し準備OK。それと同時に急激に訪れる…圧迫感。

「ぐう…っ!」

「頑張つて下さい、もう少し絞めますよー!!」

「ふぬうっ…!!」

…コルセットは嫌いだ。

きついのは勿論だけでも、…何より、くびれがない寸胴体型から無理矢理くびれを作ろうとしているのが悲しいやら切ないやらで辛い。いずれ腰がへこむんじゃないかと心配になるくらい、締め付けられて出来る上がるくびれっぽいものをルーシェラディアは忌ま忌ましげに見つめる。

くびれにこだわらなければ小柄なルーシェラディアはどのコルセットを選んで結構な隙間ができる。

特に胸の辺りはガバガバ状態なのだが…それは詰め物をしてごまかしてはいる。

…詰め物がいらぬ日があればいいな。これがルーシェラディアのささやかな願いとなっていることに今はまだ誰も気付いてはいなかった。

「くびれなんていらぬよー…」

「くびれがあつてこそそのドレスです。さあ、ルーシェラディア様、すぐに御髪を整えますからね」

有無を言わさず鏡台の前に座らされ、ファビラがルーシェラディア

の髪を整え、ベリエが小柄な顔に大仰にはないが化粧を施していく。

白粉を塗るといつも鼻の周りに散らばっている雀斑が消えるので、少しだけ鏡を見るのが好きになる。猫のような癖毛は、侍女たちが根気よく梳かしてくれたおかげで、ふわふわと柔らになり背中に垂れる。くすんだ金茶も日頃の手入れによって、明かりに照らされれば陽光に輝く金色にも見えた。さらにそれを後ろに少しばかり流して、お気に入りの白いリボンを結んでやる。

ふんわりとした檸檬色のドレスを身にまとう姿が鏡に映し出され、顔の中でも一際目立つ二対の空色の瞳がルーシェラディアを見返していた。

春の妖精のようだとファビラやベリエ、他のルーシェラディア付きの侍女たちは誉めそやすが、そこまでではないとルーシェラディアは自身への評価を冷静に下す。

ちょっと小綺麗な装いをした町娘って感じよねー。

ていうか、目が強調しすぎて骸骨みたいだわ。

いそいそと戸棚の中に入っている骸骨人形（手の平サイズでお手頃！）を取り出し、それと自分とを見比べてみる。

「やっぱり似てる……」

「ルーシェラディア様、一体何を見ているのです？」

ベリエがルーシェラディアの手元を覗きこみ、ギョツと目を見開く。

「何ですか、これ…？」

「フレディエン又ちゃん」

「ふ、ふれでい…？」

「フレディエン又ちゃんよ。私の四番目の姉様がわざわざ私のためにと手縫いで作って下さったお人形なの」

「ルーシェラディア様の姉君が…」

引き彎った頬をなんとかもとに戻そうとするベリエに、ルーシェラディアはここ一番の笑顔で頷く。

「ええ！昔、『骸骨少女フレディエン又ちゃんと蝙蝠君の大冒険』
つていう絵本がお気に入りだったのよ。それで、お姉様が私の誕生日にフレディエン又ちゃんを模したこれをプレゼントしてくれたの」

いいでしょ？と無邪気かつ、素晴らしい笑顔で微笑むルーシェラディアにベリエも精一杯の力で口角を上げながら「そうですね」と同

意する。

何で誕生日プレゼントに骸骨少女!?

それを喜ぶルーシエラディアもルーシエラディアだが、わざわざ手製で骸骨人形を作る姉もすごい。

…というか、『骸骨少女フレディエンヌちゃんと蝙蝠君の大冒険』なんていう絵本が存在することも初耳だった。

「…すごい」

心音をそのまま口に出すと、横にいたファビラが思い出すように咳く。

「四番目の姉君様は、とても器用でいらっしやいましたからね。手製のぬいぐるみはもちろん、手製のハンカチーフ、手製の服、手製のかばん、手製の靴、手製のベットカバー、手製のカーテン、手製の…」

「も、もういいです。ものすごくすごいというのは分かりました」

ルーシエラディアの四番目の姉は、今は北に位置する列国のカルトギリアの第二王子の妻となっている。

カルトギリアとルーシェラディアの国は思いのほか国交が続いていて、第二王子と四番目の姉は幼少の頃からの幼なじみだったという。ルーシェラディアが物心ついた頃には既に婚約、結婚という段階まで進んでいて、今は1歳になる娘もいるらしい。

「姉様は本当に器用だったわよね。姉様が作ったものは本当に素晴らしいわ！…料理以外は」

小さくつけ足したそれに、ファビラは小さく苦笑しながらルーシェラディアのドレスのリボンを結び直す。

「あの味は忘れられませんね…」

「ええ。あの未知とも呼べる食感と味を忘れることなんて不可能だわ…」

どんな料理だ！？とツツコミを入れたくなった侍女たちだが、それでも懸命に口を閉ざしていた。

「はあーあ。とにかく言いたいののはね、私はフレディエンヌちゃんみたいだなんてこと」

「そうですね？その人形よりルーシェラディア様のほうが健康的で

す」

ファビラの言葉に横で聞いていたベリエは「そういう話ですか!？」と心の中でつつこむ。

「健康的ねえ…、そのわりにガリガリだけど。ところで、ファビラ。何で侍女服を着てるの？」

「私はルーシェラディア様の侍女ですから」

「今は侍女じゃなくて、友達でしょ？」

「陛下が参上なさるのなら友達としてはいられません」

「そうかしら？気にしないでいいと思うけど」

「気にします。ルーシェラディア様は王妃ですから、本来ならば友でもルーシェラディア様の私室に訪れる時は客人として、陛下か宰相様に許可を頂かなくてはならないのです」

「そっなの??」

初めて聞くそれにルーシェラディアは目を丸くして、ベリエに尋ねる。

「はい。王妃様付きの侍女というのであれば出入りは自由ではありますが…」

「へー…。面倒臭いわね。友達も自由に呼べないなんて」

「面倒などと言うものではありません！」

ベリエの叱咤すると、ルーシェラディアは「はい」と間延びした声で応える。

それを更にベリエは眉を潜めるように見はしたが、もうすぐ陛下がお着きになるという知らせを受けて口をつぐんだ。

ただし、侍女部屋に下がる前にしっかりとルーシェラディアの部屋に数あるぬいぐるみたち（骸骨や悪魔、魔物などを模したやつ）を両手に抱えて…

「あーっ！ジヨセフ！クリスティーナ！ネイジェリーン！ストラウス！…」

「何で名前だけは上品なんでしょうね…」

ベリエが溜め息を着きながら、ぬいぐるみを抱えていると隣で同じくぬいぐるみを抱えたファビラが淡々と言い放つ。

「趣味ですから」

「姫ー、用意できました？」

「なんとか！陛下は？」

「もー少しでいらっしやいますよ」

そわそわと落ち着きなく部屋を徘徊するルーシエラディアをダキアスは「少しは落ち着いたらどうです？」と苦笑する。

「お、落ち…、落ち着いてますともよ！？ただなんとなく脈拍がいつもとは違う気はするけど！」

「そついつのを気持ち逸る、または落ち着きないっていうんですー。ほらほら、せっかく陛下が来るんですから笑顔で、にーっこり挨拶するんですよ？」

「こゝ、こゝろ？」

”にーっこり”を実践してみると、ダキアスは「ダメですね」と一刀両断。

「もう少し柔らかく。そんなふうに目を開いたまま唇だけ異様に上に吊り上がってたら、笑えるもんも笑えません。ほら、いつも通り、いつも通り」

「いつも通りのつもりよ。こづかしら？」

「”にっこり”というより”にんまり”ですね、それじゃあ」

”にんまり”だと確かに笑ってはいるが、何かを企んでいそうな感じがするな。とルーシェラディアは自分の口角をぎゅっぎゅっと自分の指で上に押し上げる。

「ひょーしひゃらいいによかにや（どーしたらいいのかな）」

ぷにぷにと頬をいじくりながら後ろを振り向くと、

「…ルーシェラディア、どうしました？あまり引つ張ると頬が赤くなってしまうですよ」

優しげな面立ちをした陛下が立っていらした。

………

………

………へいか？

「○× £* ……！！？（んにゃああああ！！！！？）」

声にならない叫びを上げて素早く瞳を左右に動かすと、口元を押さえながら壁際に立つダキアスがいた。

ダ〜キ〜ア〜スウウウ！！

視線で人をどうにかできるなら、まずは奴を餌食にしてやろう。と心の中で誓う。

目の端で、ニヤニヤと意地の悪いダキアスがこちらを面白がるように見えていて本気で腹が立つてくる。

陛下の御前でなければ、ヒールの高い靴で奴の足を思いっきり踏み

付けてやろうかというほどではあるが…、と、ファビラがダキアスの鳩尾に拳を入れたらしく、彼は鳩尾部分を押さえながらプルプルと小鹿のような足で身体を支えていた。

はっ、ざまあみろ

市井の中でも更に下層で使われている言葉ではあるが、ルーシエラディアは心の中で盛大に罵倒してやる。
しかし、陛下が目の前にいることを思いだしと一時中断。”にっこり笑顔”で陛下の麗しい容貌を見上げた。

「ご機嫌うるわしゅう、陛下。以前の夕食時には途中で退席してしまい申し訳ありませんでした」

「いいえ。それよりも体調のほうはどうです？」

「はい、大丈夫です。元気いっぱいです！」

握り拳を固めて腕を振って見せると、陛下は一瞬だけ目を丸くしてから「それは良かったです」と微笑んでくれた。

その笑顔にぼんやりと見惚れていたが、すぐに、また子供っぽい仕種をしてしまったと落ち込む。

もー！！馬鹿馬鹿！

もっと優雅に、レディらしい言い方ってもんがあるでしょうがー！！

今を見ていたダキアスは、またきつと壁際で笑みを堪えていることだろう。

その我慢してるのかしてないのか分からない押し殺した笑みを浮かべてこちらを見てくる彼を視界に入れたくなくて、陛下をバルコニーに面したテーブルに案内する。

「どうぞ。今、お茶を入れますね」

「ありがとう」

陛下が何故ここに来たのかは分からないが、こうやって陛下とお茶をする日があるなんて夢じゃないかとルーシェラディアは、ほわほわ浮上して月まで飛んでいきそうな心をなんとか理性で押し止める。

ファビラがあらかじめ用意してくれたティーセットを準備して、陛下にお茶をお出しする。

本来ならば侍女がしてもいい仕事だが、やはり陛下には自らお茶をお出ししたい。とお願いして今はルーシェラディア自身にやらせてもらっている。

熱々のティーポットに入っているのは、陛下が見舞いにと送ってきたくれたネイビーの葉を煎じたものだ。

ほのかな柑橘系の香りが鼻腔をくすぐり、テラスからふわりと漂う風が気持ち良い。

「美味しいです。ルーシェラディアはお茶を入れるのが得意なんです
ね」

「そんなこと…。陛下が以前送って下さったネイビーの葉を煎じましたの。良い香りですよね」

「ああ…これはネイビーの香りだったんですね。…良い香りです」

柔らかく、口元だけうつすらと笑みを浮かべる陛下は儚い女神のよう
で美しい。

その姿にうつとりとして…慌てて視線をずらす。

うつ…、

ずっと見つめていちゃいそう

ルーシェラディアはティーカップに入ったお茶に映る自分を見つめ
ながら、ふう…と息をつく。

なんだか…夢みたい。

陛下とこうした時間を過ごしてるなんて…。

これが夢ならば、今この瞬間で時が永遠に止まってしまえばいいのに。
ルーシェラディアはそう願わずにはいられなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8916s/>

小さな王妃の恋愛事情

2011年9月10日01時43分発行